

する 6 号会議室は天井の高い、110 人収容の空間です。懇親会は例会後すぐ近くの元町・中華街で行い、レストランを朝岡聡さんにセッティングしていただきます。

この 6 月例会&懇親会につきましては、5 月中に発送する往復はがきで出欠をお尋ねします。天気が良ければ楽しい一日になりますね！

▼5 月 7 日、山口佳子・平沢匡朗デュオコンサート▼

5 月 7 日（土）、駒込ソフィアザールにて、山口佳子さんがピアノの平沢匡朗さんとデュオコンサートを行います。山口佳子さんは昨年 3 月 29 日の日本ロッシェニ協会演奏会「ROSSINI パリの煌きとエスプリの中で」にも出演された気鋭のソプラノで、6 月の日生劇場《セビリアの理髪師》にも出演します。

◎山口佳子・平沢匡朗デュオコンサート

日時：2016 年 5 月 7 日（土）14 時半開演
場所：駒込ソフィアザール
全席自由：3,000 円（茶・菓子付）。予約制。当日受付で入場料を頂戴します。



曲目には、モーツァルトのコンサート・アリア、ロッシェニの《ヴェネツィアの競艇》《フィレンツェの花売り娘》《見上げた洒落女》《赤ちゃんの歌》が含まれるそうです。

ご予約、お問い合わせは、ソフィアザール 03-3822-9677（遠藤）happvendoh@sam.hi-ho.ne.jp もしくは、yohhin0620@hotmail.com

▼バリトン、Sempey の読みをサンペと訂正します▼

2014 年に ROF デビューした新進気鋭のバリトン、Florian Sempey に関して、当メルマガを含めて名前の仮名書きを「サンペイ」としましたが、先日の例会で会員の吉田さんから「本人に確認したところ、末尾の y を発音せずに、サンペ」とご教示いただきました。筆者の過去の文章をすべて修正するのは不可能ですが、ここに訂正いたします。なお、「サンペー」ではなく頭アクセントの「サンペ」とのことです。

当メルマガにかぎらず、筆者の文章で誤記や仮名書きの不備にお気づきの方は、どんどんご指摘ください。宜しくお願い致します。

▼セビリアの理髪師／オペラ・オードブル・コンサート vol.2 の動画公開▼

去る 2 月 29 日にイタリア文化会館アニュエリホールで行われた「セビリアの理髪師」オペラ・オードブル・コンサート vol.2（6 月の日生劇場公演プレ・イベント）の様子が動画で公開されました（約 65 分）。

日生劇場のサイトからご覧ください→ http://www.nissaytheatre.or.jp/news/vol2_video/

▼郵船トラベルのロッシェニ音楽祭&ヴェローナ音楽祭ツアーの概要決定！▼

筆者が講師同行する郵船トラベルのロッシェニ音楽祭&ヴェローナ音楽祭ツアーの概要が決定しましたので、日程と観賞演目を次に記しておきます（8 月 10 日出発。9 日間コースと 10 日間コースあり）。

◎イタリア夏の音楽祭めぐり、ペーザロ・ロッシェニ音楽祭&ヴェローナ音楽祭
9 日間／10 日間

- 8 月 10 日：出発、ヴェローナ泊
- 11 日：ヴェローナ音楽祭《カルメン》鑑賞
- 12 日：ヴェローナ音楽祭《トゥーランドット》（バティストニ指揮）鑑賞
- 13 日：美食の都パルマ観光を経てビザンチン芸術の宝庫ラヴェンナ泊
- 14 日：ロッシェニ音楽祭（ROF）《湖の女》鑑賞。以下ペーザロ泊
- 15 日：ロッシェニ音楽祭（ROF）《イタリアのトルコ人》鑑賞
- 16 日：ロッシェニ音楽祭（ROF）《バビロニアのチーロ》鑑賞



以上、9 日間コースは 17 日にペーザロを発って 18 日帰国。10 日間コースは 17 日にオプション別手配でモニカ・バチェッリのリサイタルと《湖の女》2 回目を鑑賞でき、18 日にペーザロを発って 19 日に帰国します。

ヴェローナではオプションツアー「マントヴァ(世界遺産)観光」、ペーザロでは別手配で若者公演《ランスへの旅》も観られます。密度の濃い 9 日間／10 日間のイタリア夏の音楽祭めぐり、是非ご一緒しましょう！

本日はこれにて失礼いたします。なお、8 月 17 日 ROF のペルカント・リサイタルは、アントニーノ・シラグ

6万人が亡くなり、リスボン市が壊滅したこの出来事については、復興や都市再生の点でも学ぶべき点があります。リスボン地震と復興については、こちらをご覧ください

[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%AA%E3%82%B9%E3%83%9C%E3%83%B3%E5%9C%B0%E9%9C%87_\(1755%E5%B9%B4\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%AA%E3%82%B9%E3%83%9C%E3%83%B3%E5%9C%B0%E9%9C%87_(1755%E5%B9%B4))

このリスボン地震では歌劇場を含めて多くの音楽資産を消失し、著名な作曲家も亡くなっています。筆者はこの地震で失われたとされるマツォーニ作曲の歌劇《アンティゴノ》再発見、地震で亡くなったポルトガル人作曲家アルメイダの歌劇《愛の勝利》について、それぞれ『レコード芸術』で紹介しました。以下、その元原稿を転載しますので、関心のある方はCDをお聴きください。

◎アントーニオ・マツォーニ：歌劇《アンティゴノ》（リスボン、1755年）

エンリーコ・オノフリ指揮ディヴィーノ・ソスピーリ マイケル・スパイアーズ(T) パメラ・ルッチャリーニ(S) ジェラルディン・マグリヴィー(S) マリア・ヒノホサ・モンテネグロ(S) マルティン・オーロ(C-T)ほか

録音：2011年1月リスボン（世界初録音） Dynamic CDS 7686/1-3 (CD3枚組)



アントーニオ・マツォーニ (Antonio Mazzoni, 1717-85) はグルックより3歳年下の作曲家。1740年代後半～60年代に19のオペラを書いたが、埋もれた存在となっていた。最初の復活は2006年、250年ぶりに蘇演された《アミンタ (Aminta)》。今回リリースされた《アンティゴノ (Antigono)》は二つ目の復活作品で、1755年リスボン大地震で消失したと思われた楽譜が近年発見され、2011年にリスボンで蘇演された際のライブ録音である。

メタスタージオ台本に基づく物語は、マケドニア王アンティゴノとその許婚者でありながら王子デメトリオを愛するエジプト王女ベレニーチェを中心に展開する。かつてベレニーチェに愛を拒まれたエピロス王アレクサンドロがその復讐にマケドニアを攻めてアンティゴノを捕え、ベレニーチェを誅めるよう迫る。そんなアレクサンドロを愛するのが、アンティゴノの娘イズメーネだ。デメトリオによって救出され、王権を取り戻したアンティゴノはベレニーチェを誅めずに幽閉する。彼女を解放したデメトリオが父との争いを避けて自殺を図ったことから王はベレニーチェへの愛を断念し、イズメーネとアレクサンドロを結ばせる。

音楽は卓越したカストラートを前提に、高度な歌唱技巧を要求する。カッファレリのために書かれたデメトリオ役のアリアが一例で (CD1-14)、ソプラノのルッチャリーニが見事に歌い切る。グアダーニのために書かれたアレクサンドロを歌うカウンターテナーのオーロ、クレアルコを歌うモンテネグロなど万全の布陣。特筆すべきはコロラトゥーラを駆使するテノールのためのアンティゴノ役を歌うスパイアーズだ。ファルセットの超高音g^{'''}から3オクターヴ駆け降りるかと思えば (CD1-11)、バリトンの声質で低音をしっかりと聴かせるなど、バリテナーならではの妙技を繰り広げる。

オノフリ指揮のディヴィーノ・ソスピーリは03年にポルトガルで設立された古楽オーケストラ。その生気あふれる演奏にライブ感も相俟って、すこぶる満足度が高い。音楽学者と演奏家の協力で加速する18世紀作品の発掘と蘇演、その最新成果としても広くお薦めしたい。

(『レコード芸術』2014年4月号の拙稿の元原稿に欧語を追加)

◎F.A. デ・アルメイダ：歌劇《愛の勝利》（リスボン、1729年）

マルコス・マガリャアエス指揮オス・ムジコス・ド・テージョ、ヴォーチェス・チェレステス アナ・キンタンス(S/ネリーナ)、カルロス・メーナ(C-T/アルシンド)、ジョアナ・シアラ(S/テルモジア)、フェルナンド・ギマランエス(T/アドラステ)、カティア・モレゾ(Ms/ジャーノ)、ジョアオ・フェルナンデス(B/ミレーニオ)

録音：2013年11月リスボン（世界初録音） Naxos 8.573380-81 (CD2枚組)



18世紀前半にポルトガルで活躍したフランシスコ・アントニオ・デ・アルメイダ (Francisco Antonio de Almeida, 1702頃-55頃) は、近年急速に復興が進む作曲家。オペラの全曲盤は同じレーベルの2011年録音《スピナルバ、または狂った老人 (La Spinalba, ovvero Il vecchio matto)》に続いてこの《愛の勝利 (Il trionfo d'amore)》が二つ目。「2部からなる6声と器楽伴奏によるスケルツォ・パストラレ」と副題された、ポルトガル王ジョアン5世の命名日を祝うセレナータ〔擬似演劇的作品〕である。

不詳の作者による台本は劇的展開に乏しく、アドラステの婚約者ネリーナがアルシンドと恋仲であるのを知ったアルシンドの恋人テルモジアが彼に死を望む。ほどなくアドラステとテルモジアが愛に目覚めたため、2組のカップルの問題解決が神の裁定に委ねられる、という内容。初演は1729年12月27日、リスボンのリベイラ王宮で行われた。

4年間のローマ留学でイタリア様式を習得した作曲家ゆえ、トランペットを含む管弦楽の華やかなシンフォニア、6役6人のレチタティーヴォとダ・カーボ付きアリア、2曲の二重唱による構成が定型的。音楽に突出した個性が乏しく、同時代の優れた作品をモデルに手堅くまとめた印象があり、筆者は第1部アドラステのアリアと二重唱にヴィヴァルディ、第2部ジャーノのパセティックなアリアにヘンデルとの類似を聴き取った。歌手はネリーナ役のアナ・キンタンスが素晴らしく、抒情的なアリア「この涙の中に」(CD2の11)の美しい声と歌唱に魅せられた。カストラートのために書かれたとおぼしきアルシンドを歌うカウンターテナー、カルロス・メーナの卓越した技巧も際立つ。

Lirico de Radio Filarmonia) で優勝し、翌 2013 年 8 月 16 日 ROF の若者公演《ランスへの旅》でベルフィオーレを歌っています。そして 2014 年 8 月 ROF 《パルミラのアウレリアーノ》にオラスペ役で出演し、同年ウィーン音楽院に入学すると、リマの国立大劇場にネモリーノで公式デビューしました。

でも 2014 年に精巣がんが発見され、2015 年 8 月の ROF 《グローリア・ミサ》でフローレスと共演した際にはスキンヘッドになっていました。そして今年 1 月にはペルーで彼の治療費を援助する基金も創設されましたが、その甲斐なく 5 月 1 日の朝、ウィーンで亡くなったとのこと。ROF のサイトには 5 月 1 日に追悼記事がアップされ、翌 2 日、ペルーのマスコミが「フローレスの後継者となるテノールの若すぎる死」を悼みました。

筆者撮影の写真 (2013 年 ROF 《ランスへの旅》カーテンコール。中央がリベラ)



ROF サイトの追悼記事はこちら→ <http://www.rossinioperafestival.it/?lang=eng&IDC=530&ID=723>

2013 年に 23 歳の彼を特集した TV 番組がユーチューブで見られます。↓

<https://www.youtube.com/watch?v=-mCJ334PpsE>

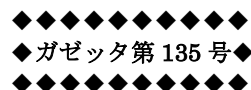
フローレスのレッスンとペルーでのネモリーノ役を含む、彼を支援する番組はこちら ↓

<https://www.youtube.com/watch?v=gCnctXaKO1E>

運命の神様は残酷ですね。謹んで哀悼の意を表します。

本日はこれにて失礼いたします。

(2016 年 5 月 5 日 水谷彰良)



◆ガゼッタ第 135 号◆

ガゼッタ第 135 号をお届けします。

本号は、「5 月例会の来場御礼と 6 月 26 日例会&懇親会の告知」、「ボローニャ歌劇場《セビーリヤの理髪師》で脇園彩さん大活躍!」、「郵船トラベルのロッシェニ音楽祭&ヴェローナ音楽祭ツアーのチラシ完成!」をお届けします。

なお、関連資料(筆写譜 上演告知ビラ)の頁の「ロッシェニ作品の筆写譜」の項目に、「《スタバト・マーテル》のアリア〈Inflammatum et Accensum〉」、「《マティルダ・ディ・シャブラン》四重唱、六重唱、第 1 幕フィナーレ総譜手写譜」を掲載し、併せて[これまで配信のメルマガ「ガゼッタ」統合版の頁](#)に、ガゼッタ第 121 号から第 125 号のまとめ(25)、第 126 号から第 130 号のまとめ(26)を掲載しました(5 月 14 日アップ)。

「ロッシェニ作品の筆写譜」の項目の頁はこちら→ <http://societarossiniana.jp/poster.html>

これまで配信のメルマガ「ガゼッタ」統合版の頁はこちら→ <http://societarossiniana.jp/lagazzetta.html>

次回例会と懇親会(6 月 26 日)については、次の告知をご覧ください。

▼5 月例会の来場御礼と 6 月 26 日例会&懇親会の告知▼

去る 5 月 8 日(日)、例会「園田隆一郎が語るロッシェニ上演と歌手、ゼツダ先生」(お話し: 園田隆一郎、聞き手・進行: 水谷彰良)を実施し、51 名のご来場をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。この日は、園田さんが ROF デビューするまでの歩みに始まり、ヨーロッパ各国でロッシェニ作品を指揮した際のエピソードや知られざるゼツダ先生の素顔など、興味深いお話をさせていただきました。

なお当日の視聴映像の一つ、園田さんが 2009 年ヴィルトバートのロッシェニ音楽祭で指揮した《泥棒かささぎ》が全幕ユーチューブでご覧いただけます→ <https://www.youtube.com/watch?v=5zRpA8z6gvc>

次回例会は 6 月 26 日(日)、横浜開港記念会館にて次のように行い、例会後に懇親会も実施します。

題目: 2016 年 ROF 予習会: 《バビロニアのチーロ》《イタリアのトルコ人》《湖の女》の魅力

講師: 水谷彰良

日時: 2016 年 6 月 26 日(日) 午後 1 時 30 分開始、午後 4 時 45 分終了予定

会場: 横浜開港記念会館、6 号会議室(定員 110 名。みなとみらい線「日本大通り」駅 1 番出口~徒歩 1 分)

地図はこちら→ <http://www.city.yokohama.lg.jp/naka/kaikou/acces.html>

会員ならびにそのご家族は無料。その他の方は当日 1,000 円を頂戴します。

内容:

今年 8 月のロッシェニ・オペラ・フェスティバル主要 3 演目《バビロニアのチーロ》《イタリアのトルコ人》《湖の女》の特色と魅力を、日本語字幕付きの上演映像を用いて概説します。どれも上演映像 DVD が市販されており、詳細な作品解説も日本ロッシェニ協会ホームページに掲載済みのため、当日は簡略な作品解説のプリント

を配布して見どころ聴きどころを紹介します。

◎懇親会（例会後に実施）

前記6月26日の例会後、横浜中華街のレストラン「富筵」にて、日本ロッシーニ協会の懇親会を行います。
時間：午後5時30分開始～9時頃までに終了予定
会場：「富筵（フエン）」横浜市中区山下町106（みなとみらい線「元町中華街」駅・徒歩3分）

予算は飲み物と税込で一人7000円を予定。会員とそのご家族のほか、会員の友人1名もご参加いただけます。正式な案内は会員への往復はがきで行い、参加者のお名前を記して返送いただく形をとらせていただきます。朝岡さんにセッティングいただき、楽しい宴会になりますので、ふるってご参加ください。

▼ボローニャ歌劇場《セビーリヤの理髪師》で脇園彩さん大活躍！▼

今月5日～15日のボローニャ歌劇場《セビーリヤの理髪師》（9回公演）に、脇園彩さんがロジーナ役で出演しています。ダブルキャストの表組、初日と最終日を含む5回の出演です（5、7、10、12、15日）。共演はアルマヴィヴァ伯爵：ルネ・バルベラ、フィガロ：ジュリアン・キム、バルトロ：パオロ・ボルドーニャと、魅力的なキャストです。

ジュネーヴ在住の会員・角岡さんが最初の3回を観劇され、初日の脇園さんについて「出だしから気合い充分という印象で、観客のハートを掴んだような印象を受けました。（中略）他の歌手も素晴らしい出来で、脇園さんを盛り上げた様に見受けられました」との感想をいただきました。日本人の活躍は嬉しいですね。

指揮はカルロ・テナン、演出はフランチェスコ・ミケリー。初演200周年の記念上演とあって、以前メルマガに書いたローマ歌劇場と同様、かなり大胆な舞台だったようです。イタリアの新聞に「ポップな理髪師」「素晴らしい脇園によるロジーナは、フラッシュダンス、レディ・ガガとリータ・パヴォーネ [往年の人気カンツォーネ歌手] のアイコン」と書かれていました（『ラ・レプブリカ』ネット版、5月7日付）。

舞台写真は、次のサイトで6枚見られます。

<http://www.operaclick.com/recensioni/teatrale/bologna-teatro-comunale-il-barbiere-di-siviglia-0>



角岡さん撮影の初日カーテンコール写真

ちなみに今年のROFアカデミーにも日本人の若い歌手が参加します。その一人が藤原歌劇団団員でもあるソプラノ、中井奈緒（なかい・なお）さん。先日お目にかかる機会があり、初対面と思ったら、「国立音大で先生のオペラ史を受講していました」と言われてビックリ！若者公演《ランスへの旅》での活躍を期待しましょう。

▼郵船トラベルのロッシーニ音楽祭&ヴェローナ音楽祭ツアーのチラシ完成！▼

当メルマガ第132号（4月15日配信）にて概要を発表しました、筆者が講師同行する郵船トラベル「ロッシーニ音楽祭&ヴェローナ音楽祭ツアー」のチラシが出来上がりました。すでにお申込みいただいた会員もおられます。今年は芸術監督にエルネスト・パラシオが就任して1年目。ROFの新たな出発点となるでしょう。

この機会に是非ご参加ください（8月10日出発。9日間コースと10日間コースあり）。

詳細とお申し込みはこちら（パンフレットもご覧いただけます）↓

http://www.ytk.co.jp/music/kaigai_opera_classic/tour/schedule/4093（9日間コース）

http://www.ytk.co.jp/music/kaigai_opera_classic/tour/schedule/4095（10日間コース）

本日はこれにて失礼いたします。

（2016年5月15日 水谷彰良）